

キャサリン・マンズフィールド作
桃山まや訳

ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

第三章 男爵夫人の妹さま

「今日の午後、新しいお客様が二人お見えになるんですよ」支配人が、朝食のテーブルにわたしの椅子を用意しながら言った。

「今朝お手紙をいただいたばかりなんですがね、ガル男爵夫人が幼いお嬢様を　お気の毒に、お口がご不自由だそうで　療養のためにこちらにおよこしになるそうなんです。ひと月ほど滞在させるおつもりだとか。男爵夫人もいずれお見えになるそうですよ」
「ガル男爵夫人ですって」食堂に入っているなりその名を耳にした医者のおとさんが声を上げた。「ねえ、ここにいらっしやるの？　その方なら、先週『スポーツ・エンド・サロン』にお写真が載っていたのを見たわ。皇帝ご一家ともお親しくしていらっしやるとかで、皇后陛下からは『あなた』って呼ばれているんですよ。まあ、なにはともあれ歓迎すべきことじゃないの。そういうことなら、わたしもお医者様のおっしやるとおり、あと六週間ここにいようかしら。お子さんのお相手ほど楽しいことはないもの」

「とおっしやっても、お嬢様はお口がご不自由だそうですよ」支配人は申し訳なさそうに言った。

「あら、それがどうかして？　身体のご不自由なお子さんにはなんともいえない可愛らしさがあるものよ」

ほかの泊り客たちもみな、食堂にやってくるなりこの素晴らしいニュースを聞かされた。

「ガル男爵夫人のお嬢様がお見えになるんですよ。男爵夫人もひと月のうちにはこちらにいらっしやるそうです」

コーヒーとロールパンだけの朝食がいつのまにか宴会のような大騒ぎになっていた。わたしたちはこの知らせにわきたった。高貴な方々の逸話をカップに注いでは、砂糖を加えてすすり、醜聞には惜しげもなくたっぷりとバターを塗って、次々と平らげていった。

「お二人にはあなたのお隣のお部屋をご用意しました」支配人がわたしに言った。「それ

で、もしさしつかえなければ、そちらのベッドの上にかかっているエリザベス皇后の肖像画を、お二人のお部屋のソファの上に移したいのですが……」

「それはいい考えねえ、あのお写真があれば、いくらかでもご自分の家にいるような気分になれるでしょうから」お役人の奥さんはそう言うつとわたしの手を軽く叩いた。「それに、あなたにとっては全く意味のないものですよ」

わたしは気持ちが悪んでいくのを感じた。青いベルベットにダイヤモンドをちりばめたドレス姿の胸像画など、べつに惜しくも何ともなかったけれど、外国人というレッテルを貼って、わたしをのけ者にしようとする、お役人の奥さんの言葉にはがっかりさせられた。

とにかくその日は、男爵夫人のお嬢さまのことが気になってみんなそわそわしていた。暑かったので散歩にも行かず、しばらくめいめいのベッドに横になっていたが、コーヒの時間になると、いっせいにサロンに集まってきた。

やがて入り口の前で馬車の止まる音が聞こえた。背の高い若い女性が子供の手を引いて降りてきた。二人はホールに入り、出迎えの挨拶を受けると、そのまま部屋の方へ案内されていった。宿泊名簿にサインをするために、ふたたび姿を現したのは、それから十分くらい後のことだった。

その女性は、襟元と袖口に白いレースをあしらった、いやにぴったりした黒いドレスを着ていた。茶色い髪は三つ編みにして黒いリボンで結んでいる。顔は青白く、左のほほに小さなホクロがあった。

「わたくしはガル男爵夫人の妹です」その人が言った。吸い取り紙の上でペン先を試しながら、わたしたちの方を見て少し困ったような笑みを浮かべた。どんなに退屈な人生にだって、こんなふうなときめく瞬間があるものだ。そう、ふた月のあいだに貴婦人が二人もやってくるなんてことが！ 支配人はあわてて新しいペン先を取りにいった。

わたしのような下々の者の目には、身体が不自由だからといって、その子供が特別かわいく見えるということはなかった。黄ばみ防止の青み剤でしょっちゅう洗われているような感じのする子供で、髪の毛なんかまるで灰色の毛糸のようだし、着ているエプロンドレスにしても、がちがちに糊がきかせてあって 世間から身を守る盾のよう

ぴんと立ったフリルの陰からでないところを見ることもできないらしい。それに、高貴なおばさまに、「この子の耳掃除まで期待するのは無理というものだろう。早い話が、耳の汚れた口の不自由な子供なんて、わたしにとっては気のめいる相手でしかなかった。二人の席はテーブルの上座に用意された。わたしたちはだれから話を切り出したものかと、顔を見合わせながらしばらくもじもじしていた。

やがて、お役人の奥さんが口を開いた。「長旅のお疲れが出ないとよろしゅうございませぬえ」

「ええ」男爵夫人の妹さまはカップに目を落として微笑んだ。

「小さいお嬢さまも、お疲れでなければよろしいんですけど」と医者のお奥さんが続いた。

「大丈夫ですわ」

「今宵はよくお休みなれますように」先生がうやうやしく言った。

「ありがとうございます」

ミュンヘンからやってきた詩人は、二人から片時も目を離さなかった。ネクタイに好きなだけコーヒーを吸わせながら、穴の開くほど二人を見つめていた。

靈感の象徴ペガサスがくびきから放たれようとしているのだな、とわたしは思った。孤独に寄せる詩にもいよいよ終わりの時が来たようだ。男爵夫人の妹さまには、献身的であることのほかに、人に靈感を与える何かがそなわっているらしい。このときを境に、詩人の病んだ心は病床をたたんで歩き始めたのだった。

夕食が済むと二人はすぐに部屋へ引き上げていった。わたしたちはいつまでも食堂に残って二人の噂をしていた。

「まったくよく似ていらつしやること」医者のお奥さんがしみじみと言った。「瓜二つと言つてもいいくらい。それに、なんて品のいい物腰かしら。ご自分の姪御さんにまであんなに丁寧に接していらつしやるなんて」

「気の毒ですよ、手のかかる子供なんか押し付けられちゃって」ボンからやってきた学生さんが吐き捨てるように言った。この学生さんは、自分の身体にある三つの傷と勲章のリボンがいたくご自慢のようだったが、男爵夫人の妹さまには、それほど威力を発揮しているようには見えなかった。

しばらくはみんな夢中だった。男爵夫人の妹さまがこれほど美しくなければ、ペンション中がここまで彼女の話でもちきりになることはなかっただろう。わたしたちは飽きることもなく彼女を賛美し、どんな些細なことでも噂した。そして、いやな顔ひとつせず、一同の思いを受け止めてくださるこのお方に、満足しきっていたのだった。

詩人は男爵夫人の妹さまの信頼をすっかり勝ちとっていた。散歩のときにはかわりに本をもち、膝の上で姪御さまを遊ばせることも許されていた。ある朝、詩人はノートを持ってサロンにやってくると、自分の詩をみんなに披露してくれた。

「男爵夫人の妹さまが、もうすぐ修道院にお入りになるとおっしゃったものですか」詩人が言った。（それを聞いてボンの学生さんが立ち上がった）「タベ、窓辺に座つて気持ちのいい風に吹かれながら、こんな詩を書いてみたんです」

「まあ、なんてお優しい方かしら」医者のお奥さんが言った。

詩人は医者のお奥さんに冷たいまなざしを向けた。奥さんはみるみるうちに赤くなった。「では読みます」

君は修道院へ逃げ去るのか？

かくも若く清らかな乙女よ

雌鹿のように野を駆け巡り
そこに御身の美しさを見つけ給え

残りの九連もそれぞれに美しく、やはりどれも彼女に勇氣ある行動を促す内容だった。もしも妹さまが詩人の忠告に従ったとしたら、たとえ残りの人生をすべて修道院の中で送ったとしても、息つく暇もないほどあわただしい生活を送ることになったにちがいない。

「あの方にはこの詩の写しをさしあげました」詩人が言った。「今日は一緒に野草を探しに行くことになっているんです」

学生さんは立ち上がるとそのまま部屋から出て行った。わたしは詩人にもつ一度今の詩を読んでくれるように頼んだ。ちょうど六連目が終わるところとされているところだった。なにげなく窓の外を見ると、男爵夫人の妹さまと三つの傷のある学生さんが正門から出て行くのが見えた。たぶんそのことが、わたしに必要以上に愛想のいいお礼を言わせたのだらう。詩人はわたしにまで詩の写しをくれると言いだした。

気ぜわしい日々が過ぎていった。わたしたちは粗末なペンションから、高い城壁のうへまで舞い上がってしまった。後は落ちていくばかりだ。ある日の午後、わたしが書斎にいと、医者のお奥さんがやってきて親しげに話しを始めた。

「あのお方がわたしにご自分のことをお話になったの」医者の奥さんが小声で言った。「わざわざわたしの寝室までいらして腕を揉んで下さったのよ。わたしがリユーマチで苦しんでいることはあなたも知っているでしょ。それが素敵なのよ、あの方だったらもう六度もプロポーズされたんですって。どれも泣けてくるようないいお話よ。お相手は高貴なお生まれの方ばかりだし。一番素敵だったのは森の中のプロポーズだったわ。

いえね、べつに客間でのプロポーズがいけないと言っているわけではないのよ。そりゃあ、二つという話は四方を壁で囲まれているところですから方がいいに決まっているけど

でも、その森はお邸の中の森でね、お相手は若い将校さん。その方が、『あなたは人の手が触れたことのない若木のような』っておっしゃったんですって。ねえ、デリカシーのある言葉だと思わない！」医者の奥さんはため息をついて天を仰いだ。

「もっとも、あなたがたイギリス人に、こういう気持ちをはわかれつつ言っほうが無理かもしれないわね。クリケット場で足をむき出しにしたり、裏庭で犬を飼ったりするよなひとたちですもの。まったくお気の毒としか言いようがないわ！若い娘さんは野バラのようでなくちゃ。それにしても、イギリスの女性がどうやって結婚までこぎつけるのか知りたいものだけわ」

医者の奥さんが頭を振ったので、つられてわたしまで頭を振ってしまった。胸の中に苦いものが広がっていた。どうやら、わたしはイギリス人とはとてもない生き方をしているらしい。ロマンスの妖精は、貴族的なドイツ人の上にはかそのばら色の翼を広げてくれないのだろうか？

わたしは部屋に戻り、ピンク色のスカーフをかぶると、メーリケの詩集をもって庭に出た。あずまやの裏ではライラックが紫色の花をみごとに咲かせていた。それとなく半喪服を連想させるような色調に悲哀を感じながら、腰を下ろして詩を書いてみた。

かの花、揺れては夢見がちに頭を垂れ
我ら、ひしと寄り添い口づけをかわす。

おしまい！でも「ひしと寄り添い」っていう言葉にはまるでロマンスが感じられない。これでは洋服ダンスのなかに押し込められているみたいだ。わたしの野バラはもう枯れてしまったのだろうか？ わたしは葉っぱをかみながら膝を抱えた。そのとき 魔法がかかったように あずまやの中から話し声が聞こえてきた。男爵夫人の妹さまとボソボソ話していた学生さんの声だった。

他人の恋でもないよりはましだ。わたしは耳をそばだてた。

「なんてかわいらしい手をしていらっしやるのでしょ？」ボンからやってきた学生さんが言った。「黒いドレスの池に浮かぶ睡蓮の花のようだ」その声に偽りは感じられない。わたしは高貴なお方のお答えを待った。ささやくような声しか聞こえてこないが、まんならでもなさそうな様子。

「お手をとつてもよろしいですか」ため息がふたつ聞こえた たぶん手をとつたのだらう 学生さんは暗い水面から高貴な睡蓮の花をすくい上げたというわけだ。

「あなたの指にそえたばかりの大きな指を「ごらんささい」

「まあ、隅々までよくお手入れが行き届いていらっしやること」男爵夫人の妹さまは恥ずかしそうに言った。

まったくなんて人だらう！ 恋は指のお手入れの問題だともいうのだろうか？

「ああ、あなたに接吻したい」学生さんがつぶやいた。

「でも、ご覧の通り、わたくしひどい鼻かぜを引いておりますでしょ。あなたにおうつししたら大変。昨日の夜なんか十六回もくしゃみをしましたのよ。おかげでハンカチを三枚もだめにしてしまいましたわ」

わたしはメーリケの詩集をライラックのしげみの中に放り投げてベンションへ戻った。入り口のところまでくると、大きな自動車がうなり声を上げて停車していた。サロンの中が騒がしい。男爵夫人がなんの前触れもなくお嬢さまをお訪ねになったのだ。カキ色のレインコートを着たまま、サロンの真ん中に立って、支配人に何か尋ねている。宿泊客が総出で男爵夫人を取り巻いていた。医者のお奥さんまで、時刻表を調べるようなふりをして、できるかぎり男爵夫人に近づこうとしている。

「で、うちのメイドはどこに行っただんですか？」男爵夫人が尋ねた。

「そのような方はおいでになっておりません」支配人が答えた。「こちらにはお嬢さまとお嬢さましかお泊りではありませんが」

「妹ですって！」男爵夫人が声を上げた。「そんなばかな、わたくしには妹などおりませんよ。子供にしているのはわたしのお針子の娘です」
「なんと！　う幕切れ！」